

諏訪小だより

改めて「学校で学ぶ」ことを考えるー過去の国語科の教材文を振り返って

4月の全体保護者会では、学校の役割の一つを「子供たちに生きる力を身に付けさせる」とお伝えしました。しかし、改めて「学校で何を学ぶのだろう」と考えると、一層具体的にそして分かりやすく説明することが難しいことに気がきます。そこで、私の経験で恐縮ですが、小学校時代の国語科の教材を基に、学校で学ぶことを考えてみたいと思います。

「ニッポニア・ニッポン」

新潟県佐渡島を中心に、「トキ」が生息していることは御存じかと思います。学名「ニッポニア・ニッポン」、日本を代表する鳥と訳してよいでしょうか。私はこの題の説明文を5年生のときに読みました。

乱獲された時期があり、天然記念物にもなって保護すべき鳥となりましたが、第二次世界大戦もあってトキの数はどんどん減っていきます。この状況を何とかしたい、と、寄付や補助を募りながら保護活動をする方々の姿は私の心を打ちました。わずかですが増加した、という記述を読んだとき、私はトキがどうになってしまうのがとても心配になりました。

その年の夏、私は両親に「佐渡に行きたい」とねだります。仕方がないと思ったのでしょう、私の無理な願いを叶えてくれました。今のように情報を多様に集めることができない時代でしたから、もちろんトキに出会うことはできませんでした。しかし、その後「環境省レッドデータ」にも入っているトキは今でも大いに気になっています。もちろん、このことは、私に環境問題を考えさせるきっかけをくれました。

余談になりますが、私もそれなりに忙しくなり、佐渡島に行ったこの旅行が我が家の最後の家族旅行となりました。

「最後の授業」(アフフオンズ・ドーデ作)

これは6年生で学んだ文学的文章でした。

普仏戦争(1870~1871年)により、フランス領であったアルザス・ロレーヌ地方がプロイセン王国に奪われたときの話であるとされます。この地方はその後ドイツ語が用いられることとなりますが、この作品には、フランス語で行われる最後の授業の日が描かれています。担任の先生は、いかにフランス語が素晴らしい言語であるかを説きながら、母国語に対する深い思いを込めて授業を進めていきます。

私の中に今でも残っているのは、最後の場面です。この授業が終わった後、先生はうなだれながら授業の終わりを告げ、子供たちに下校を命じます。戦いによって言葉が奪われる、そんなことがあるのか、と

大きな衝撃を受けました。この作品に出会ってからおよそ50年が経とうとしていますが、私はいま改めて「最後の授業」とロシアによるウクライナ侵攻とを結び付けています。

「最後の授業」は、翻訳を少し変えながら、また、当初は中学校の教科書に掲載されていましたが、1927年から1981年までの長きに亘って教材であった「名作」であります。時代による解釈の変化等によって残念ながら姿を消しますが、このことも含めて作品に触れること、そしてそのときに感じたことを大切にしていきたいと思います。

「大陸は動く」(大竹政和作)

さて、もちろん、私が教材として学んできた以外にも多くの素晴らしい作品はあります。例えば、私が教員になってから扱った5年生の説明的文章「大陸は動く」は、現在五つに分けられている地球上の大陸がかつては一つであった、というアルフレッド・ウェゲナーという学者の説が記されています。にわかには信じ難くありますが、46億年とも言われる地球の歴史を振り返れば、1年間でわずか数cm程のプレートの動きが今の大陸を作り出したとも言えます。

「大陸は動く」は科学の目を開かず、と高い評価を受けていました。現在は国語科の教科書には載っていませんが、例えば「NHK for School」に紹介されています。地震のメカニズムを調べることもつながっていきます。

「最後の授業」がなぜ教科書から姿を消したのかについては多くの論評があります。しかし、その正否はあるにせよ、教材を読むということは「唯一の正解を教室の中で探し出す作業ではない」とし、「自らの問題意識をもとに」読み進め、「その行為自体が常に外側の世界とつながっていなければならない」と述べられてもいます。もちろん国語科に限らず、全ての教科、領域との出会いから発見や驚き、さらには問いをもち、自ら探究し続けて学びを社会の諸活動と結び付けていかれるようにする、このことが学校の役割の一つと改めてお伝えしたいと思います。いかがでしょうか。

来週に開催します学校公開では、本校の教職員の具体的な取組を御紹介したいと思います。お忙しいとは存じますが、ぜひお越しく下さい。

参考

消えた「最後の授業」ー言葉・国家・教育

(府川源一郎 1992年 大修館書店)